粘土あそび（三年保育）

大阪学芸大学付属幼稚園
植田有子

シナリオ『粘土とあそぶ子どもたち』

日時　昭・32・3のある日　快晴

場所　海組保育室（海組は三年保育児）
畳　13畳敷

登場人物　三年保育児　16名
保育者　1名（私）

舞台装置。部屋中央、8畳敷きくらいにビニールをひろげ、その真中に粘土バケツ2はい）の山を用意する。なおビニールの片隅に粘土粉を空缶に入れスプーンをそえて置く。
。部屋の片隅にぬるま湯とタオル一枚。
。湯と反対側の隅にビニールをしきポスターカラー、筆、バケツ、雑巾四、五枚を準備する。
。出窓には桜草が咲きみだれている。

演出　部屋の時計が午前8時30分を示す。〝私〟は「もうそろそろ子どもがくる時間だなあ！」の思い入れよろしく……もくもくと暖かいストーブの側でたくさんの紙風船のやぶれを修繕している。こんな状態のもとに海組の一日はあけていく。

開幕

「先生！　お早ようございます」やっぱりTが一番である。にこにこと一人で鞄の始末をしてオーバーをぬいでいる。頭を見ると〝おひなまつり〟のなごりの丁髷がまだのこり惜しそうにゆれている。「先生！　お早ようございます」「Tちゃん！　おはようございます」　U子とK子が仲よく手をつないでやって来た。「やあ！　粘土おいてあるわ！　はよ(早く)オーバぬいでしよう」懸命に朝の身支度をととのえている。このときに、どやどやと10人ほど元気に登園してくる。「うれしい！　粘土や！　粘土や！」私はやっぱり粘土を用意しておいて良かったと思う。「おい！　おまえ手まくりゃ（袖をまきあげる）！」とすばやいU君。「そや

けどこのビニール大きいなあ！　みんな手つないでみよう」

お手手つないで　バアー（しゃがんで粘土をのぞく）

野道をゆけば　バアー（げらげら笑いこけている）

みんな　かわい　バアー（　〃　）

小鳥になって　バアー（　〃　）

……

キャーキャー　大さわぎになって粘土のまわりをぐるぐるまわりながら立ったり坐わったりしてふざけている。私はオーヤ……オヤ……

えこへ組一番のワンマンSが重役出勤してくる。「やあ！　粘土やな！　先生おはよう。そこ退け退けっ」すばやくエプロンをつけて粘土を山から二握り取る。一同おどろいたようにビニールの囲わりへ坐わりこんで粘土に取りくむ。Sは欲ぼけて大きくまた握り膝もとへよせる。K「僕今日こんで（これで）ええわ。Sちゃん！　まえ風呂うまかったね。そやけど（けれども）先生にちょっと手伝うてもろたやろ」「ちがうわ！　煙突なんぼしてもこけるよっておこしてもろただけじゃ」「そうか、今日何つくるねん？」「ないしょ」こんな会話のやりとりを耳にしながら一同夢中になってあそび始めた。「この餡こ、ちょっとやらかい（やわらかい）ぞ、もうちょっと粉まぜるわ」とY君……。「僕らこんで（これで）ええわ」……Yは粉の缶をあけてスプーンにいっぱい粉をとりだし砂糖やぞと自分の粘土にふりかけてよいしょ、よいしょ、とぬりだす。同じくまねをして粉を加える者数名……。寒がりのNとH子はせっせとぬるま湯に手をつけにいっては、また粘土をまるめている。私は風船のつづくりをしながら黙って見ている。

「先生！　できた。ガス風呂や！　色、ぬってもええ（いいか）？」とSのうれしそうな顔……。「わあ！　上手にできたね。今度はガス風呂？　風呂を、ビニールの上へおいたままで、ぬりなさいね……」「はいっ」ぬれたままの粘土に、ポスターカラーは、つやつやと光っている。こんなにして今日の収獲は、

風呂（ガス）	1
桜草	1
動物園	1
トンネル	1
電車	1
人間	2
もたれかかっている人	1
お雛様供物　皿物	1
蓋物	2
今日はこんでやんぴ（これでやめ）	4

（粘土をねっただけでやめたもの）

なかなか豪勢なので私は有頂天になって、みんなで眺めて褒めちぎる。子どもたちも、うれしいのかビニールをふいたり後かたづけをしたり、こまねずみのように働らく。「先生！『三匹の子豚ごっこ』しよう僕、ちい豚ちゃん！」私はもうれつにかけ

ながら子どもを追って庭へとびだす。

——静かに幕——

以上

右が海組においての最終の粘土あそびの記録です。もちろんこれが最高の状態と夢にも思っておりませんが、粘土をじっと見つめて手出しをしなかった初めの頃を思いますと、ほんとに感激せずにはいられません。粘土の固さを加減しようとし、内緒で自分独特のものを創りだそうとする態度が少しでもできたようなので、とてもうれしく思っています。何にも染らない子……。三年間も幼稚園へくる子……。こんな子どもたちをあてがわれたときにすべてのことにどんなふうにはっていけばいいだろうかと随分思い悩みました。

粘土あそびも、三年間、いつも粘土を充分に当てがって自由につくらせるというのでなくて、三才児には三才児らしい楽しさを味わわせながら、粘土あそびの基盤となるものを、知らず知らずに身につけさせたいと思いました。三年間マンネリズムにおちいって何とはなしの粘土あそびにならぬよう、三才児には最低線に単純化して遊ぼうと思いました。粘土あそびといってもあまりやっておりませんが、以下に一考察を報告してみましょう。

4・18　入園式

4・30　始めて粘土を山にして部屋の真中へ出す。当分粘土板はつかわないつもり……。ひろびろとビニールをしく。粘土にどれくらい親しみがあるかを調査……。「何だろう」とみんな一応は眼を向けるが無視して積木あそび、絵本読みに興じる。ときどきぺたぺたと山はだをたたく者がある。私は粉ねりからはいることに決心する。

5・6　「泥んこあそび」をするときのように金だらいに粉を入れ、水をいろいろに加わえて「ねろねろ」とねる。金だらいは三杯にして共同で「泥んこあそび」をやる。初めは手がどろどろになるが(砂糖といっている)粉を、だんだん増すと手につかなくなることを体験する。そしてその良い加減の感触を楽しみながら、ちぎったり、ひっつけたり、ぶっつけたりする。

子どもは粘土をぶっつけたときの「ぺたん」という音とともに、その粘土が、板なり紙なりにひっついて、逆さにしても落ちないようすを、とてもよろこぶ。また、あるときには、まるめたり(だんごやさん)、たたいたり(お好み焼きや)、今までただ指先で雨上りに泥んこあそびをしているような感じのねり方だったのを、「お餅やさんごっこ」といって全身運動におきかえたりする。三才児はこんな単純なあそびを喜々として力いっぱいやる。

7月……親指をつかって穴をあけたり(たこ焼)、手のひらでおさえつけたり、手をおしつけて型をとったり、充分に手を使うよういろいろのあそびを工夫する。丸棒をあてがって伸ばしたり、たたんだりする。いろいろの

器具でのばしてどんなになるか体験する。手のひらで蛇ごっこもする。

9月……前記の外にいろいろの型（紅葉した葉など）をおしつけて、親指で切りとってみる。共同で山をこしらえたり、ばったの囲いを作ったりする。こんな単純なあそびが、とてもおもしろいのか、いつもよろこんでやり、一向に何も作りださないのでやや心配になる。

10月……海組も幼稚園になれてきたし、運動会シーズンではあるし、年長児の出入りが多くなるにつれて、年長児の示唆をうけることが多くなる。

11・12・1・2月は寒いのと、粘土の品切れで全然していない。

3月……5日に、年が明けて始めて粘土を用意する。飛びついていろんな物をつくりだす。種々雑多……。思いがけないものがあり、保育者を呆然とさせる。前記記録はその第二回目……。

今年は試みとしてこういう方法をとってみましたが、これについては良かったと思うこと、は、粘土の使い方が頼もしくて、きれいで、こせこせと破片的にならないのは、確かのようです。ただ創造的になったのは寒い間とぎれて三月には、とても新鮮に感じたこと、子どもが知能的に成長してきたよい時期にあったためのまぐれあたりかも解りません。こんな単純なそして大事なことを三才児に少しもおしつけにならず、飽きもしないで喜んであそばせることができるということが、保育者にとってはとても楽しいことだと思いますし、大きな発見だと思っています。

＊　＊　＊

書評

幼稚園における指導の実際①

（健康を主とした一日の指導）

▲文部省編

印刷も、りっぱで、内容も豊富で、とても読みやすい上に、本書には、類書にないような特長があるように思う。サブタイトルに「健康を主とした一日の指導」とあるが、当然なこととして、園の目標の全領域にわたる一日の指導の計画と実例がのっている。端的にいえば例の六領域にわけた精密な（？）叙述がないところに、この書の第一の長所があると思う。健康とか、社会生活の指導というものは常に全面的総合的に行われるものであることを、よく物語っていると思う。それゆえに、その記述が非常に現実的実際的になっている。（坂元彦太郎）

〈フレーベル館発行　A5判三四〇頁　一一二円〉